

自分と向き合うひたむきな時間  
書道には新しい発見があります

「美しい」と、きれいは全く違う。ピカソやゴッホは美しい。しかし決してきれいではない」。帝京大学で書道部の活動を見学したとき、奇才の芸術家、岡本太郎のこの言葉を思い出した。小学校の授業で習い始める書道といえば、きれいで整った正しいとされるお手本があり、そのひとつの正解を目標に書くというイメージ。そこに自分らしさはあるのだろうかかと疑問に思ったことがある。そんな考えを吹き飛ばすパワーがこの書道にはあった。そのことを教えてくれたのは帝京大学の岡本直人先生。大学では珍しい書道の専門施設、書道研究所の主宰でもある。「まねるという手段も、もちろん大切なことです。繰り返しを積み重ねて基礎を作るわけですから。ただどある瞬間からそこを離れて、自分なりの正解が見えてくるはず。吸収と発散。そこに向けて書き続ける。また、書道は思いのほか体を使う行為でもあります。自分の体を動かして瞬間的に何かを書いていく。その喜びは人間として根源的なものだと思います」。正解はひとつではないという新しい発見。「少し抽象的な話になりますが、書くということは、書かない部分を選ぶことでもあります。書道には黒と白の世界。書く黒と、書かない白と虚。美しい芸術とは、虚実の皮膜にあるというのが東洋芸術に共通する根本的な考え方なんです。それは自然を完全に征服しようというのではなく、偶然という自然と人工の間にあるものを大切に作る姿勢でもあります。そしてそれを追求していくと、禅的というか、日常から遊離する瞬間がある。書道の醍醐味ですね」。授業では、教職専攻の学生だけでなく一般の学生も集まり、大きな教室が満員になるといいます。その魅力を、経済学部3年生の書道部部长・岩崎 聖さんに伺った。「書道のよさは、同じ筆跡が二度と現れないところです。繰り返し書いていると、自分がイメージしている形にすごく近づく瞬間があって、そのときはキターツという感じですね。続けることで何かを発見できる喜び。あと毎回、自分の状態を知ることができません。いらいらしているとか、悩んでいるとか……。真っ白な半紙と向き合っていて書く時間は、自分と向きあう時間でもありません。墨の香りは心を落ち着かせてくれます。他の人の作品を見て話し合うと人の心が理解できるし、魅力はいっぱいありますね」。お手本を超えた、その瞬間にしかない自分なりの筆の流れ。無心になつて、何枚も何枚も重ねて行き着いた筆の跡。そこには、美しい文字が立ち上がっていました。

feel TEIKYO   
あなたにつながる帝京大学 撮影・市橋織江



帝京大学 本部大学PR推進室  
TEL.03-3964-4162  
〒173-8605 東京都板橋区加賀2-11-1



帝京大学をもっと感じるマガジンをお届けします  
帝京大学のあれこれを心地よい写真とともにお届けする冊子  
「feel TEIKYO」キャンパスライフ編・ジョブガイド編を配布中。  
請求先→03-3964-4162 (本部大学PR推進室)